

神の上にいた神、笑

シンタは崖っぷちだった。

幼少の頃、そして中学期と続いたいじめで心身はズタボロ。

心気症によって太り、体の病気も発症。

それでもなんとか周囲に支えられここまでやってきた。

過去を回想し、悪い思い出の点と点を繋げようものなら、宇宙の果てまで意識はぶっとび把握できないものにまでなってしまうためそれだけはシンタにとってタブーであった。

そして幼少期中学期のあのいじめを心の中で何度も思い出し受け入

れようとするのだが、なかなか底が見えない日々が続くのであった。

そんなシンタだったが、新しい世界を知る。

半ばひきこもり、くすぶっていた日々に夜明けが見えたのだ。

とある皿洗い工場に勇気を出して踏み出し、勤めはじめた時だ。

クリーニング工場。衣服などの洗濯も請け負っているが、シンタが入った部署は食器洗い。

シンタはめきめきと腕を上げ、数ヶ月で皿洗いのプロフェッショナルを自負するまでになった。

きっと俺は・・・過去のあの痛みがあるからここまでの底力を振り絞れるのだろう。

シントは工場の高い天井の少し下にある小さな窓から薄い青色の空にかかる雲を見つめながら思った。

要は、凡人ではないというやつだ・・・。

シントはこぶしを握り締める。

俺は神になったんだ。

あんな経験を克服するなんて俺にしか出来ないからなあ。

ちょっとずれているへんてこな話である。

そこで現れたのが、神の上の神である。

名前を山下ともゆきと言う。

彼は頭が禿げ上がり、まるで仙人のような風貌をしていた。

工場の服は数え切れないほどの回数の洗濯によって汚れ、年季が入っている。この工場でのキャリアが長いことも一目瞭然。

山下ともゆきによって、周囲が見えていなかったシンタは上には上の存在を知るのである。

圧倒的スピードでこなすシンタの更にはるか上を行くスピード。とてもではないが追いつけない。

そんなシンタは冷静に周囲を見回す。

よく見れば出来る人ばかり。

シンタはまだ新入りでプロでもなんでもなかったのだ。

シンタは宇宙を見ていただけであった。

現実に戻って来れたのは山下ともゆきのおかげなのである。

真正面からシンタと向き合い、

君はまだ新入りの青二才に過ぎないよ、と。

圧倒的差を見せつけたのである。

神の上には何があるのだろうか？

ほとんどの人間が一度は考えるのではないだろうか。

全宇宙を創生したのが神であれば、その上など存在しないのではな
いか？

しかし神の上には更に神がいたのである。

注釈としては・・・あくまでシンタの人生の話。

まるで、とある戦闘アニメの世界のようである。

神の上に更に神がいて、そのさらに上には冥王（めいおう）、親王（しんのう）がいるのである、笑。

シンタは口笛を吹いて見せた。

そして安心しきったようにフーッと息を吐くのであった。

自分など小さな存在なのだ。

体験版はここまでです。